

2014年6月30日

男女別学シンポジウム

西川 先生

皆さま、今晚は。本日はお忙しい中、第3回男女別学シンポジウムにお越しいただきまして有難うございます。私は本日司会をつとめさせていただきます鷗友学園女子中学高等学校の西川邦子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

このシンポジウムは日本男女別学教育研究会代表、中井俊巳先生が著書「なぜ男女別学は子どもを伸ばすのか」を刊行されたのを機に、第1回が2010年に、そして第2回が翌2011年11月に開かれまして、今回第3回目を迎えます。

男女は当然ながら平等であり同権ですが、それぞれ特性を持ちます。その特性を理解し、考慮したうえで子供を育て教えるならば、よりよい成果を生むでしょう。

今回はご案内にもありましたように、中井先生が主に小学生における男女別の育て方、教え方についてお話しし、その後中学生・高校生の指導について男女別学校5名の校長・副校長の先生方にパネルディスカッションというかたちで、お話をさせていただきます。

それでは開会の挨拶を鷗友学園女子中学高等学校元校長で現学校法人鷗友学園常務理事の清水哲雄先生にお願いします。

—開会の挨拶—

清水 先生

あらためまして、皆様こんばんは。遠路そして、ご多用中のなか、このように沢山の方々にお集まりいただきまして、大変ありがとうございます。

司会のほうからご紹介がありましたように今回三回目ですが、残念ながら昨年是一年、抜けております。なかなか都合がつかなくて、一年間空白を作ってしまった。今日このような形で第三回を迎えることができましたのは大変喜ばしいことだと考えております。

日本では、戦後、公立高等学校を中心にGHQの方針、あるいは指導だったのでしょうか、ほとんどが共学校としてスタートを切りました。このことは日本にとって良いことだったのか、悪いことだったのか、おそらく将来の歴史学者が検証するであろうと思います。

東北のほうでは、しばらく女子校もありましたので、その辺もおそらく検証されるだろうと思いますが、そういうなかで私立学校では、言葉はよくわかりませんが、いわゆる戦前のままのかたちで男子校や女子校として教育活動を行ってまいりました。しかしながら、この少子化の影響或いは経営的な視点からなのでしょうか、共学校に変わる私学も増えてまいりました。

男女平等の同権の時代でもありますから、面と向かって「いまだき女子校もないだろう」と、言われたこともあります。こういう発言は恐らく、区別と差別の違いが認識されてな

いということなのだと思います。

先ほどの司会者のお話にもありましたように、私どもは、その子にとってどういう教育が良いのか、また、直接的な個人への教育だけでなく、その子にとってどういう環境を与えるのが良いのかを思考し実践する立場にあります。この部分の検討の上に、さらにこどもの年齢に応じた教育をすべき立場にあるので、一層の研究が必要だと思っております。

現在、日本では 5,100 数校の高等学校があります。そのなかで男子校が何パーセントぐらいかご存知でしょうか。男子校はざっと 2.8%で 3%もありません。女子校のほうは少し多くて、その倍ほど 6.8%ぐらいでしょうか。いずれにしろマイナーな存在になっていることは事実です。

ただ、共学校でも、男子と女子を分けて教育を行うなど、新しい取り組みを行っている学校もあります。本日の中井先生の講演のあとのパネリストになっていただいた先生のなかにはそういう学校があります、例えば男子校が女子を受け入れて別学校にしている、というようなことです。そうすると男子の教育と女子への教育とどのように違うのかが鮮明に表れるので大変興味深く聞きたいと思っております。

数年まえにニュージーランドに教育視察旅行に参りました。

その際に、サミュエル・マジソンスクールという女子校を見学させていただいたのですが、その副校長先生に校内案内をしていただいたときに「ここは女子校ですが、共学校、女子校、男子校の違いを先生はどのように思われますか。」と質問をさせていただきました。そのときに、副校長先生はこのように答えられました。「簡単にいうと、別学のほうが良い成績を出すという分析がある。それは男子と女子の学習のスタイルが異なり、たとえば女子は共同的に学ぶ傾向があるので、それを踏まえた教育をおこなっているからだ。このことは国家試験レベルで比較することによってすでに証明されていることである。」とお話ししてくださいました。やはりそうかと思いつつ、それが具体的にどのようなことなのかが、しっかり把握できれば良いと思いました。

日本でも確かにそうだな、という例もあります。たとえばあまり良い例ではないかもしれませんが、東京大学合格者の上位 30 校をリストアップしてみると、そのうち 22 校が私学、14 校ほどが別学校です。

具体的に私たちはもっと細かいことやどういう対応をしたらいいかを知りたいわけです。どのような性差を踏まえた教育を行えば良いのか、今回三回目ですが、このあと皆さんとともに考えて、知見を深めて参りたいと思っております。どうぞ最後までよろしく願いし申し上げます。

西川 先生

清水先生ありがとうございました。

つぎに基調講演として、中井俊巳先生にお話をさせていただきます。先生のことはみなさん、よくご存じと思いますが、教育評論家として男女別学の良さを広め、そして日夜、執筆や講演を精力的に行っていると思います。

演題は「男女別の育て方、教え方で子供は伸びる」です。よろしくお願いいたします。

—基調講演—

中井俊巳先生（作家・教育評論家）

こんばんは、中井俊巳と申します。

私は長崎の小中学校で23年間、教師をしていました。いまは京都で主に執筆活動をしています。今日は『男女別の育て方、教え方で子供は伸びる』ということをおもに小学生の保護者向けのお話にはなるのですが、させていただきます。

★内容については、スライド36枚を含めた別紙PDFをご自由にダウンロードができます。

最後にお願いしたいことは、この男女別学教育の良さをもっと広めていただきたい、ということです。残念ながらまだ日本では、この良さが認められていません。

皆様は今日、本当に貴重な体験をしています。わざわざ北海道から4名来られています。仙台からも広島からも大阪からも福岡からも長崎からも静岡からもいらっしやっています。

各地域での皆様の声を通して、また報道関係の方も、是非男女別学の良さをたくさんの方に良さを伝えていただければ、と思います。

大変、端折った話になってしまいましたけれど、本当に御清聴ありがとうございました。このあとのパネルディスカッションも非常に中身の濃いものですので是非、最後まで聞かれ、素晴らしいものをお持ち帰り下さい。どうもありがとうございました。

西川先生

中井先生、ありがとうございました。それぞれの方の普段の教育実践のなかで、「あーそうだなー」と共感されることがたくさんあったと思います。私も、その一人です。

—パネルディスカッション—

西川 先生

これからパネルディスカッションを始めたいと思います。

ここで本日コーディネーターを務められます、東京女子学園中学高等学校の實吉恒夫先生にマイクをお渡しします。先生、よろしくお願いいたします。

實吉先生

今日の大役を仰せ使っております、實吉でございます。

今日、中井先生の本をすでにお求めいただいたかたは後ろのほうに、これまで一回目、二回目のシンポジウムの内容について触れてありますので、ご覧いただいているかと思えます。

第一回目のときには、校長先生がたとお話をしました。二回目は各学校で教科担当をされている先生がたとお話をさせていただきました。今日はまた、それぞれの立場で学校経営されている校長先生に、あるいは副校長先生に、お話をうかがうというふうにしていきたいというふうに思っております。

まずご紹介します。

品川女子学院中等部・高等部校長の漆先生です。

本郷中学校高等学校校長の北原先生です。

国学院大学久我山中学高等学校校長の今井先生です。

桐光学園中学高等学校校長の村上先生です。

かえつ有明中学校高等学校副校長の石川先生です。

品川女子学院校長

漆 先生

皆さま、こんばんは。品川女子学院の漆と申します。

今日は、女子校代表ということで私学の女子校について、話したいと思います。最初に、ご紹介いただきました本を出版するに際して卒業生たちに「女子校で良かったと思うことは何？」と聞いたときの生の声をご紹介したいと思います。

1、男子に頼らず自分でやり遂げる力が身についた。

実験でも、重いものを持つだけでも、男の子に頼れない。そういうことで、男女別の学校だったら分担されてしまったかもしれないことも、やらざるを得ないということで能力の発見というものがあるようです。

3、男女の能力差を意識せずいろんなことにチャレンジできた。

班のリーダーをやるのも生徒会長も全部女子なので、チャレンジせざるを得ない環境というのがある。

4、先生による男女の分けへだてがない。

小学校のときはそういうことを感じたというような意見もありました。先生が女性の社会進出を積極的に応援してくれた。これはさきほど中井先生の話でも、まわりの意見でけっこう勇気が挫けたということがあったので、そうやって教員も応援するということで自己肯定感も高まるということもあるようです。

5、同性にしか相談できない悩みなどをオープンにできた。

先ほど打ち合わせの場で先生方とお話ししていたら、これは男子校も同じで伸び伸び自分を出せるってところが男女別学の良さじゃないかという話も出ていました。

5、男子がいないので恋愛関係の嫉妬に巻き込まれないで済む。

6、一生付き合える友達ができた。

これは多いです。先ほど西川先生とも話していました。土曜日ともなると卒業生がいっぱい学校に来る。うちもそうなんです。一生の友達ができるっていうのが別学の良さじゃないかと思います。

7、作法の学習などで知らないうちにマナーが身につく、後で役だった。

本校は着付けの授業があります。全員が着物の文化を学び、浴衣を一人で着られるようにする。どこの女子校でも茶道などをやる機会があるのではないのでしょうか？茶道、礼法、それから華道、運針の時間がある豊島岡さんみたいな学校もありますし、そういうことを普通に自然に授業のなかでやっていくので、そのときはちょっとめんどくさいな、と思ったりしますけれども大人になってそういうことが身につけていて良かったな、得したな、と思うことが女子校ならではの良さじゃないか、こんなことも語ってくれました。

8、プレゼン力、特に英語のプレゼン力がついた。

これはいろんな学校の卒業生、女子校の子たちに聞きます。中高ぐらいは、先程もありましたが女の子は、成長のプロセスで早熟なところがあり「喋る力」力があります。男の子の場合は後で、たとえば理系に進んで、そこで英語のプレゼンが必要だから能力をつけていくというところがあるかもしれないのですが、中高の早めの時期においては、この英語のプレゼンテーションや英語のコミュニケーション力というのは女の子の方がどちらかというと得意分野なのでは。得意分野を存分に伸ばる時期に伸ばすことができるというのも別学の良さではないかなということを感じています。

現在、電機メーカーで働いている理系の卒業生が就職活動の時に言っていた話です。最

終の面接のとき、30名残ったそうですが、29名が大学院卒の男性だったそうです。

内定が出た理由を「女子校で身につけたコミュニケーション力だと思う」と言っていました。男性はどちらかというと、研究の話だけ、自分の話だけをしてしまいがちだが、自分は周りをよく見て、この会社で私が期待されることは何なのだろう、ということを見ながらコミュニケーション力を発揮して自分の良さをプレゼンした。そのことが結果的に合格に結びついたようです。入社後、その子の上司が言っていたのですが、会社のなかでもゴールだけじゃなくて、その研究のためにいい実験器具を作ったり、チームをまとめたりするような、コミュニケーション能力の高い人が必要で、彼女はそういった橋渡しの役をしてくれると言っていました。

さて、女子校というのは、伝統校が多いのですが、本校も来年90周年を迎えます。大正10年前後で創立された学校が多いのです。その当時から女子教育一筋という学校が目立ちます。当時は女性に参政権がないなかで、なんとか女子にも教育のチャンスをとということで創立する女子校が多かったのです。

しかし、先程、清水先生のお話にありましたけれども「何で今、女子教育なのか、何でいまさら女子校なのか？」ということは私たちも聞かれることがあります。今だからこそ、この日本には女子教育が必要だと私どもは確信しています。

ちょっと数字でお話ししたいと思います。

こちらですがこれは労働曲線です。もし、この人口減少社会のなかで将来的に男の人と女の人働く率が変わらないとすると、この青いラインのようにどんどん日本を支える労働人口が減っていきます。しかし、もし、女の人が男の人と同じぐらい半々に働いたとすれば、この赤いグラフのようにまだまだ日本を支える若い人が伸びていくということになります。

こういう社会というものは、北欧などではもうすでに起きているのです。そこで、どういことが行われるかということ、この数字ご存知でしょうか。『202030』のちほど配られるガールスカウトの資料にもあるかと思うのですが、「2020年までに日本は指導的立場にある女性のパーセンテージを30%以上にする。」これは今年の一月のダボス会議で安倍首相が日本の首相としては初めて英語で基調講演をしまして世界に公約しているのです。たとえばノルウェーなどでは有名な話ですが、上場企業の役付き率が一方の性が40%を下回らない、という決まりを作って数年でこれを達成しています。

まさに今、このように労働社会においてはマイノリティーである女性に良い風が吹いてくる。そういう時代に入っているわけです。ということは私たち世代が見たこともないような数の女性が、見たこともないような職種で、見たこともないような立場で、働く新しい日本の未来に向かって今こそ新しい女子教育が必要なときにもう差し掛かっているわけです。

「男女の違いってというのは何かな」っていうことを、あるとき、ハーバードビジネススクールで MBA を取った女性の方に生徒たちへ話してもらったのです。その方が、こんなことをおっしゃっていました。

アメリカのトップリーダーの女性にずっと取材をしたところ、男性のリーダーと違うところが二つあると言うんです。その二つは何か。一つは「好きなことを仕事にしてきた。」という人が圧倒的に多い。女の子は好きなことを一生懸命やるっていう感覚的なところがあります。もう一つは「はじめからトップになろうと思わなかった」。では、どうして出世したくないのになぜトップになったのか、というと、「チームの人を励ましたり周りに協力したりしているうちに、チームごと上がって請われてトップになっていた」という人が男性にくらべて圧倒的に多いそうなんです。

つまり、リーダーシップ一つとっても、女性の場合はこの協調型、サーバントリーダーシップといいますけれども、皆を立てていくリーダーシップ。この違いがやはりあるわけです。これから女性と男性が半々に生きていく、働いていく時代に向けて、多くの男性のなかで、男に勝つぞタイプではなくて男女の良さをちゃんとわきまえたうえで、良いところを発揮できるような、そういうパートナーシップがとれるような女子教育が、今だからこそ必要なのだと考えています。

そしてこのグラフですが、M字カーブ現象というのがでていますが、女性の年齢を横軸に取り、縦に働いている率を取ると、ほとんどの国が台形になるんです。ある歳になったら働いて、歳を取ったらやめていく。

ところが日本と韓国だけはMの字を描く、これをM字カーブというのですが、何故Mのようになるかということ、落ち始めが28歳ぐらいなのです。日本女性の第一子平均出産年齢30歳、そこで一回休む人が現在は6割です。そして同じ仕事に戻れている人は、実際は二割しかいないんです。三人産むと5%というふうに言われています。つまり、今の女子教育は先ほど言った明るい未来か、または過渡期で、現状のように子育てと両立するのがまだまだ難しいというところに出ていく可能性もあるのです。女子の場合、一度休む人が6割。ここで学歴。もし学歴というのが学校名であると、それがリセットされてしまうので、女子の進路指導の場合は「学習歴」がとても大事です。学校名の学歴ではなくて、「どこの大学、学部で私はこういう力をつけています。」「私はこういうコミュニケーション能力があります。」ということがとても大切になっていきます。

先程、二割と言いましたが、同じ立場で復職している二割の人の多くは、こういった専門性のある人、資格職の人が圧倒的に有利になってきます。そのためには、やはり「学習歴」を保っていく、ということが必要になると思います。

つまり、「何故、今、女子校が必要か」というと、そういった長期的な人生のライフデザインを考えた教育というのが、女子校では出来るからなのです。男性と女性の人生は違います。男性だったら自分の子供は50歳でも60歳でもできますよね。でも、女の子では20

代 30 代の産み時を逃すとリスクがある出産になっていく、という特徴があるので、どちらかをあきらめないで済む教育というのが必要になるのではないかと思います。

最後に「私学の良さはプライスレス」というお話をさせていただきます。

よく 3 歳までの教育が大事というようなことが言われますが、私ども私学をやっておりますと、3 歳までと同じぐらいに、この 12 歳から 18 歳までの時期というのは後では取り返せない大切な時期だと考えます。

そこには反抗期がありますよね。あれは何故あると思いますか？親の人格から離れて一人の人間が形成される、人格形成期だからなのです。この時期に今、いったような成長期でもあるので男女の心身の成長カーブに合わせた学習環境にいることによって、後では間に合わない、そのときしか吸収できないものが吸収できる、一生の自分を支える自分軸というものを作ってくれるのです。それがこの別学で過ごす時期だと思います。

そして最後が「一生の友達ができる」これは別学の子たちが口を揃えていう事ですが、これは成人式の写真です。成人式の午後、本校は 70% ぐらいの生徒が遊びに来ます。そのぐらい、みんな学校が大好きなんです。人格形成期を一緒に過ごした、そして男女別だから思い切りオープンにできた。大人になっても愚痴も言えるし、自慢もできる。そういった一生のネットワークをプレゼントできるのも別学ならではの良さであると思います。

實吉先生

見事なものです。16 分ですから 1 分オーバー。これぐらいは許しましょう。

あとになって少し質問をお受けしたいというふうに思います。

今井先生は前回、数学科の先生としてご参加をいただいて、前回のときには石原先生という開成で数学の先生をされていて、いわゆる Z 会ですね、Z 会でいま教えられているのか、活躍をされているのですが、開成で教えていたときの男の子の教え方では、もうぜんぜん女子には通じないという実感を持って、そのときお話をいただいて、それを受けて今井先生にお話を伺ったような気がします。

今井先生の学校は国学院久我山ということで元々は男子校。それから中学校を開設していった、それから男女別学で今はやっているという意味では学校としての変遷もありますし、その変遷のなかで感じになっている部分もあると思うので今井先生、よろしく願いいたします。

国学院大学久我山中学高等学校校長

今井先生

こんにちは。久我山中学高等学校の今井です。

漆先生が社会的な一般論を十分にお話しされましたので、私は自分の学校を例にとりまして少し具体的なお話をさせていただこうと思います。

いま、紹介にありました通り、私どもは男子校からスタートしました。その後女子の募

集を始め、さらに中学生の募集を復活、というふうに言われているのですが本当は、夜間も含めると随分と昔に女子教育をしていた学校なんです。ただ、長いこと男子の教育だけをやっているように見えますし、私どもも元は男子校と言っています。そこに女子を入学させたあとで、大変な戸惑いがありました。

さきほど漆先生がおっしゃったように、女子校では男子に頼らず何でもやらなければいけない状況があります。それに反してという話になります。女子の入学が始まったころの私は、まだまだ若々しい頃でした。私よりも力のある女子生徒に模擬テストの返却されてきた答案や段ボールを持たせましたところ、当時の教頭に呼び出しを受けて、女子に荷物を持たせるとは何ということをするんだ、と怒られました。今でしたら絶対にあり得ないことです。漆先生がおっしゃるように、女子でもそれぞれ出来る範囲で仕事を割り振るのですが、男子ばかりだった所に女子が入ってきたので、本当に女子を大事に、大事にしていた先輩方の存在があり、私はひたすら「そんなことはない、男女平等だ」とずっと思い続けて、今に至ります。

そういうわけで、学校の中では、皆それぞれに、いろいろな悩みを抱えながらここまで来たのですが、やはり男子と女子には特性の違いというものがあります。女子のほうが小学校時代も、それから中学の前半、場合によると高校の一年生ぐらいまで男子よりも精神的に高いです。私の子供時代を振り返っても、女子のほうが高かった、と思います。

そういう訳で女子の方がはやく成長する。それが一体、どこに表れてくるのかという生徒指導上で出てくるのです。反抗期であったり、色々と難しい問題が起きてくるのは、女子では中学一年生の三学期ごろ、もうすでにそういった兆候が表れます。しかし、男子のほうは少し遅れるのです。中学二年生の二学期から、早い子は一学期から出ますが、多くの場合は二年生の二学期頃になるとちょっと元気でいろいろなことをやってくれます。というような成長の違いがあるので、キャリア教育を始める時期が違ってきます。

私どもの学校でキャリア教育をスタートさせるのは、中学二年生の女子が最初です。経済同友会の方々にお世話になっておりますけれども、女子の方が先に講演をしていただいて、そして会社訪問をする。その会社訪問した結果をまとめて冊子にする。夏休みには、それぞれが会社を訪問する。そしてレポートを文化祭で発表する。そして二学期になりますと、経済同友会の方にまた来ていただいて、創・工・商。創はクリエイショ、そしてテクノロジー、ビジネスと。三分野に分けて来ていただき、それぞれ選択して話を聞いてまとめるというようなことを中二からスタートします。その間男子の方はやっていません。男子のほうは中二の最後になりましてやっと、講演を聴きます。そして中三になりまして、クエストを取り入れています。これは企業と連携を組んで、最後、企業のほうからミッションが来て、それが認められますと商品化されるということもあることで、そういう商品開発にまで繋がるようなこと、これは中学三年生なのです。一年ちょっとずれているんです。男の子というのはミッションもらって自分で作り出していくっていうのがものすごく乗れます。女の子は燃えないわけではないのですが、どちらかというといろんな話を聞いて

て考えて、じゃあ自分の将来どうしようとなります。だから企業を訪問すると、質問することはなにか？子供を産んでからでも仕事はできますか？結婚して、やめちゃったりしませんか？こんな質問がやはり出るんですね。ですから企業を選ぶときにもちょっと気を使います。幸いなことに協力をいただいているところが辞めない会社が多いものですから、女性だって一生働けるとか、仮に結婚で地方に行っても働けるとか、そういう話を聞いてほっとしたと子供たちが話をしている。そういうわけで、男女で時期をずらしたり、内容を変えてキャリア教育をしていて良いのではと思います。

男子と女子の違いは、行事にも表れています。中学二年生の英語のサマーキャンプも女子が先です。このサマーキャンプけっこう楽しくやるんです。アメリカの学生の設定されたものの中で本当に楽しそうに喜んで参加する。ところがこれって男子だったら本当に楽しくやるだろうか、という疑問が残るんです。男子はちょっと冷めて一歩引いてしまうのではないかと。現実にはそのプログラムをやって下さっている方たちに伺いますと、共学でやると女子が喋って男子が喋らないとか。男子校と女子校を比べると女子校のほうが喋ってくれるといいます。

これは、先ほど漆先生のおっしゃったことと繋がることなのかな、というふうに思います。女子は与えられた環境のなかで十分に楽しんでいくことができる。男子は「自分が、自分が」というものがある。非常に強い興味を抱き、自分が楽しいと思えるものだったら楽しむけれども、そうでなかったら一歩引いて眺めている。そういう行動パターンの違いが、私どもの学校では少し見られるのかなということなんです。

男女別々の授業をもし毎日一緒にやったらどんなことが起こるか。通常、男子と女子は別々に授業をやっておりますが、高校三年の受験生の演習だけ、男女一緒にやることがあります。年度によって、あるいは選択の数によって、やらないこともあります。本年は一緒にやる授業があるのですが、男子女子両方の生徒から苦情がでたのです。ちょっと人数が多いクラスだったのですが、女子からは「男の子がうるさい」「男女別々にやってきて、なぜここで男と一緒に勉強しなくちゃいけないの？」と。うるさいというのは雑談もあるが、それだけではなく女子に何かと言ってくるのです。これが男子から来る苦情と繋がります。男子の苦情も「女子と一緒にやるのやめてくれない？」と。その理由は「女子は質問する内容が細かい」、男子はヒントひとつで後は自分で考える、細かいことは後で聞けばいい、概ね聞いて、どんどん先に進めたい。これ男子なんです。女子は聞きたいんです、細かく聞きたいんです。「今私、これ聞かなかつたら、もうこれ以上先生の授業聞けません」くらいの勢いをもっているわけです。そこで聞くと男子の生徒は「うるさいなあー」、とか「後で聞けよっ」て言っちゃうわけです。だまっていればいいのですが言うんです。これが「うるさい」と女子は感じるのです。

男子と女子には、そこに大きな違いがあるのです。ですから私たちは、その違いを生かして授業ができる。共学っていうのは色々な行事と一緒にやります。私どもは別学ですが行事などは一緒にできます。文化祭の準備などは男女一緒にやっても、授業だけはやっぱ

り効率よくいきたいんですね。そして、子供たちも効率よくいきたいのだと思います。というわけで男子と女子は、それぞれの特徴を生かした授業展開をしたい。ここから先は自習、自分でやりなさい、ここまでは説明するよ、っていうこのポイントの男女の違いをまた男女別々の学校でも認識しながらやらなければ、やはり効果はないのだと思います。しかしそこを認識さえすれば必ず、効率の良い授業、子供たちにとっても良かったなって思える授業ができるはずである、と私は思っています。もし共感していただける方がいらっしゃいましたら、ぜひこれを広めていただけたらと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

實吉先生

私立でも効率の良い教育ができる。もうひとつ、今井先生、この間の方に女子に対して使うプリントと男の子にプリントの返し方が違うって話があったじゃないですか。そこをもうちょっと話していただけませんか。

今井先生

私が、女子の授業を持っていたときのことで。校長になって去年も一年間やっていたのですが、女子は、私どもが教材与えるときにあまり負担を与え過ぎると挫折感があるので、ある程度与えて「先生終わったから、もっと勉強したい」っていうように、なるべくしているんです。そうすると、ある単元で自分が弱いと感じたとき、「先生、この単元、私弱いので、もっと問題をもらえませんか？」と言って来ます。いいよ、と言って時間がある限り、その子専用の教材作るので、タイトルに〇〇さんの微積分とか、〇〇さんの数列とか書いて渡すんです。これが入るだけで女子のモチベーション上がるんです。男の子はそれでもあまり喜ばない。みんなどうせ同じだろ、で終わっちゃうんですが。女子は、それを大事に友達に見せずに家に帰ってこっそり解いて私のところに持ってきます。というような男女の違いをこの間、お話しさせていただきました。ありがとうございました。

實吉先生

それでは次に北原先生、啓明からまた女子校にも行って、今日お出でになって、今や悠々とした男子校に変貌を遂げた本郷高校の校長というふうには今は、お勤めいただいています。私なんかは本郷というとラグビーの学校だろうぐらいにしか、昔はいいませんでしたけど。いまは北原先生の大変なご努力があり、あるいはまえの高橋先生のご努力があって学校がずいぶん変わってきたのかなーという風には思いますが。共学校での経験、そしていま、男子校に行ってとくにお気づきのところなども含めて、お話しいただければと思います。よろしく願いいたします。

本郷中学校・高等学校校長

北原先生

こんばんは。それぞれの先生方、いろいろな経歴をお持ちですが、私は大学をでたあと気象研究所というところに数年いて、教職に就いたのは29歳からです。男子校で27年くらい。そのあと共学校に行って、それから女子校に二年ほどお世話になって本郷に異動しています。今、お話になられた男子校、女子校、共学校。それぞれを、渡り歩いてきたという経験を持っています。男子校と共学校、女子校がどう違うかということ、実体験として、「こういう場合がありました。」ということをお話しして、それにどのように対応すべきか、というようなことを一緒に考えさせていただくと非常に嬉しいと思っています。

まず、最初の非常に長かった男子校というより先に、私自身ついでのことですが高校のときには男女の比率が二対一くらいで男子の多いところでした。気象研究所では95対5くらいの比率、大学もだいたい95対5くらいの比率のところでした。今度男子校に移って1800対15というくらいの圧倒的男子の所で生活をしていました。男子校では興味・関心が乗ればそれにのめり込んでしまうそういうタイプの生徒を、様々な所で見てきました。

非常に印象に残っていることは、その当時、中学二年生の生徒でしたが、お正月の小遣いが6万円くらい集まって、その6万円を使って天体観測の赤道儀という装置が欲しかった生徒がおりました。天体の動きを自分の持っている望遠鏡に取り付けて、自動追尾させて、星の写真を撮りたい。そういうセットを作りたい。そこで彼は一生懸命、図面を引いて、この大田・品川あたりの小さな町工場をローラー作戦で、「この図面のものを作ってもらにはいくらかかりますか？」って聞き歩いたそうです。

結果は、できるけれども30万円だね。自分の貯金は6万円しかない。そこで、30何件目かの工場に行ったときに「君、小遣いいくら持っているの?」「6万円しかありません。」と言ったら、その工場主が、「僕も中学時代の時に作りたい。欲しかった。だけれども、お金がなくてできなかったから、これは俺が作る。」と言って作ってくれました。そのいきさつを天文ガイドという雑誌に投稿したら無条件で記事掲載になりました。中学二年生の記事が載ったということがありました。そのくらい男の子がのめり込んでしまえば、乗っていくという経験がありました。

そんな男子校から共学校に行ったわけです。その共学校についてはだいぶ前から知っていた学校ですから、そんなに大きな違いはないだろうという感じで異動しました。

始業式に、「自分は校長になって、この学校でやりたいことはこれからの日本の社会を支えるリーダーをこの学校から輩出したいんです。」ということをお話しました。始業式が終わって、校長室に戻っていると、高校三年生の生徒会長だという女子生徒がひとりで校長室を訪ねてきました。

「今日、先生は始業式で『社会のリーダーをこの学校から輩出したい』ということをお話

されました。私は高校三年で実質的には12月までしか授業がありません。それまでのあいだに先生が考えているような学校生活をするとするならば、具体的にどういうことをしたらいいか、先生のお考えを聞かせてください」と質問に来ました。

これには、びっくりしました。もし私だったら一人で校長室にはちょっと行けないですね。行くなれば同じ仲間2,3人で、行くと思いますが、一人で来たのです。その後も同じように、自分の考えをきちんと伝えるような場面が色々な形で続きました。

校長で数年間いきましたが毎年、何らかの形でそんなことが起きます。話は一寸飛びますが、男子校にいたとき思っていたこととして、新任の先生に最初に担任をお願いするとき、中一から高三までのどの学年を新任の先生に任せても良いと思いますか。

私の経験で進路指導はまだ大変ですから、中学二年生だと思っていました。中学二年生というのはどんな学年か、中学一年に入学して学校の様子はある程度分かってきて安定している状態です。中三、高一になると、反抗期がちょっと話題になります。ここに新人教員を当てるには不安がある。そうすると中二ということになります。共学校でも同じように中二が一番安定しているだろうと思って生徒の指導の状況を見ていました。これが全然違いました。

どこが一番安定しているか、それは男子校でも共学校でも女子高でも一番安定していたのは準社会人として共に考えることができる高校三年生でした。高校三年生が一番安定してみている。どうしてそんなことが起きるのか不思議でした。

その学校はたまたま帰国子女が非常に多い学校で、七五三というくらい帰国子女が在籍していました。高校生の7割の生徒、五割の中学生、三割の小学生が海外経験のある生徒でした。その七五三の割合の影響によるものと思いました。同時に日本がグローバル化するならば、ゆくゆくこういう多様化した生徒対応をしなくてはいけない、というように思っていました。しかし、帰国子女だけではない何かが違う、それは男女の差も大きく関わっているということを感じるようになりました。どんな場面で一番感じたかというと2学期の後半、保護者向けにある展示物の発表会があります。それは高校一年生の家庭科の授業でテディベアを作って発表するというものです。家庭科の時間ですから男子生徒も女子生徒も作品展示をします。テディベア自身はキットになっています。きちんとつくればほぼ同じようにできるはずですが、作品はそれぞれ違います。その授業では、それだけではありません。帰国子女が多い学校ですから、「テディベアに民族衣装をかけなさい。なぜその民族衣装を選んだかということレポートにして添付する」いわゆる総合学習みたいなことで提出させるわけです。

作品を見ると、男子生徒のいい加減さ。女子生徒の努力と工夫から真面目に取り組む姿にこれだけの差があることから、帰国子女による要因だけではなく、男女の差によるものも大きいと感じさせられました。もうひとつ、高校の家庭科の授業で「校長にお弁当を作る」というのがありました。代表が注文を聞きに来ます。「和風にしますか、中華にしますか

か、フランス風にしますか」、「漬物はつけますか、どうしますか」と聞きに来ます。私は「和風で結構です。漬物だけはぜひつけてください。」と言ったら、朝どりの漬物を作りたいので農家の友達のところに行って、「お母さんに言って、畑から採ってきてね」。「あなたはこれね」とすべてのことを段取りして、ちゃんと昼に届きました。届いた弁当を見たときびっくりしました。ものすごく上品にできていました。味もなかなか良いです。いいんですが、私にとって量が少なかった。これはいったいどういうことなのかと先生に伺ったら「先生の体重と年齢を考慮しての量ですよ。」と答えが返ってきました。もし先生が少ないと思うのであれば「食生活を考えてください。」という忠告を受けたのです。

実は、学校を異動してから昼食は、寮があった関係で「寮のお弁当」を食べていました。この期間にじわじわと体重が3キロから4キロ、増加していました。「どうしてなんだろう」と若干は気にしていました。家庭科の先生が来て「先生ね、あのお弁当は高校生向けのカロリー計算です。先生向けのカロリー計算はこちらです。」「あー、そこに違いが出るものですか」ということを感じて納得しました。

その次に二年間ですけれども女子校に行きました。教師経験のなかで一番安心できる学校生活でした。どういうところが安心できるか、何か非常に無理そうな注文をしても、生徒たちがものすごく工夫してやってくれました。私は理科ですから、かなり力や手加減を必要とするハードな実験もやりました。例えば木と木をこすり合わせて「火おこしの実験」です。摩擦で「火おこしの実験」をやりますと男の子でも全グループが時間のなかで火が付くかどうかわかりません。けれども「昔の人はきちんとやって、この火からご飯を作りました、火をおこすなんて言うのは昔の人は普通にできたのだから、あなたがたも工夫してください。」と言うだけで彼女たち、一生懸命やってくれます。一生懸命やって全グループともちゃんと「火おこし」ができます。男の子のほうは、すぐ飽きてしまう生徒もいてなかなかできません。

先ほど漆先生の話にあったように作法の時間もあります。それから華道の時間もありました。お茶の時間もありました。それぞれの部分の所で本当に全部こなしているわけです。文化祭っていうとメンバーが少ないですから、一人で二役か三役やらなくてははいけないのですが、それを事前の準備からこなしていきます。本当に安心して任せることができます。そのようなことができることが、「すごい女子教育」だなという印象を受けました。

トータルして私自身が様々な教育観のなかで教職という仕事をやらせてもらった。それぞれの学校が「特色を生かした取り組みをしないと、伸びるものも伸びない」のだという、そんな印象を非常に強く持っています。そのためにはやはり男女別学という学習は、特性を伸ばす点で意味があり効果的だと感じています。

最後に一言だけ本郷のちょっとしたPRをさせていただきます。7人制のラグビーがオリンピックの正式種目になりました。今年初めて高校生の全国大会が開かれます。第一回目の東京代表は幸いにして本郷になりました。活動時間が制限されている中での練習ですが、集中して取り組むことや最後まであきらめないこと、などの行動は別学の成果とみること

もできます。「よくやった!」と励ましてください。

どうも御清聴ありがとうございました。

實吉先生

それでは今年からっていうか、かえつさんはもともと女子校だった。それが校舎を移転して建て替えるときに共学校化した。その共学校化したけれども実際にやってみて、ということで今、中学校一年生から高校一年生までは男女別学の仕組みにしたというふうに学校として変遷をされていったなー、というふうに思います。石川先生にこういうふうにいると怒られるのですけれど、なかでは鶴の一声だというふうに言ってるかたがいるようですけれども。石川先生、入られて若い先生のうちにいろんなことを託されて、男女別学というふうに踏み切られたとおもうんですけれども、そのへんの想いも含めて少しお話しただきたいというふうに思います。

かえつ有明中・高等学校副校長

石川先生

皆さん、こんばんは。なんか「鶴の一声」って皆さんも、どう反応していいか難しいところだと思います(笑)。いま、立派な話を聞いていて、ぶっちゃけて話しをしていいのかな、と思いましたが、実は第二回にはそちら側に、座っております。一回目は出なかったんですけれども第二回目は参加していたんです。そのときは2011年で、たしか10月か11月で、九段のどこかのビルで嵐のなかで開催されたんです。実は2011年って学校としてとっても困っている時でした。中高一貫を初めて6年目、卒業生がまだ出ていない状況で募集上のトピックスがないところでした。震災があつて、うちは有明じゃないですか。あそこは次関東の震災で津波が来たらもう学校なくなるみたいな、そんな話もでてきて、もう見学者がわっと減っちゃって。「もうどうしたもんかな。」と。「これはなんとかしなきゃいけないなあ」と。やっぱりまだまだ6年の学校で何かトピックスがないと募集上困ると考えました。当時入学時からの難関コースと総合コースっていう分け方が、募集上のトピックスでした。それを何とか変えるしかないな。で、最初考えたんですけれど、じゃあ、まあどこかでよくやっているように超難関と難関にするか。なんかな、いやだ。自分自身、難関なんていうのは本当はあんまり興味がなくて。どうでもいいというか超難関バカみたいだな。じゃあ、それじゃなかったら文系理系をやるからサイエンスって教科のコンテンツを持ってるし、サイエンスとインターナショナルコースでやっちゃおうか。と思ったんですけど、これもコストがかかるじゃないですか。というか会議を考えると職員室から暴動が起きるなど。とにかくなんかトピックスを探しに九段のセンタービルにたどり着いたんです。そしたらこのセミナーに出あった。これは面白いな、と。これは実はあんまりお金かかんないでできるかな、と。要は共学で集めた生徒を男の子のクラスと女の子の

クラスに分けちゃえばいいんじゃないか、と。これが一番、そんなにシラバスがどうのこうのとか、多少ありますけど定期試験の問題も二つ作ることはないし、いいかな。難関と総合、二つ作っていましたが一本化できる。本当にそういう事です。

それでそこから次の年の募集まで、10月、11月だったですから、翌年の5月には発表しなければいけないので、そこから突貫工事で内部をどうやって口説いていくかという話で、そのときに、今井先生のところに直ぐすつとんで行って、「今井先生教えてください」って言って「久我山の真似をしようかな」と次は桐光も教えてもらって行ってきました。見ればみるほどまあ、「これはやっぱり面白いなあー」と。「なんかやってみる価値はあるなー」と。私はけっこう直観から入る方でして、あんまり深く考えず直観的に「これは面白い」から立案しました。それまでも実は最初の一貫生の6年間でいろんな試みをしていくなかで、じつは男女別クラスはやっていました。一期生の教育を立案する時に、実は今日、関係が近い方もいらっしゃるんですけど、某神奈川県あの理事長です。うちを立ち上げるときに男女別クラスっていうのはどこもやってないからやったら面白いからやれよ、と言われたということがあって。いきなり中一からやると面白くないから二年間は共学でやって中だるみをしないように中三と高一は別学にして高二、高三は文系理系にしたらいいんじゃないか、って言われてそれで一期生はそのようにやってみたのです。しかし矛盾があって、最初から男子と女子を採る比率を考えていなかったもので、それをやるとクラスが6クラス、8クラスになっちゃうから教室入れない。これはコスト増でダメみたいな話で、じつは一期生はやったんですけど二期生からはやめたんです。そういうシステムが眠っていたのを思い出して、自分で否定しながらもう一回やるっていうのは、いろいろあったんですけど、でもいいことはやろうと思って。

そして早速2校の見学をして、中井先生の著作100冊ほど買わせていただきまして、教職員、皆で読んでくれと、これをやりたいからということ。

考えて、考えて、そこからまた考えに考えて話したら時間ないんですけども、もうパンフレットを作っていくというところから始めました。

これから、男子と女子の育て方の話をしますけど、別学一期生をそうやってスタートして今年二年目になって。初めのときに考えたのは、男子と女子のクラスにしたら担任が大変じゃないかと直観的に思いました。実は前任校では男子校が共学化になる、それも体験したんです。それで、今のかえつでは女子校から共学になるところを見てきたので、共学になると共通して授業やってくにはつまんなくなっちゃうんです。盛り上がりに欠けるな、というところで、別学のほうが盛り上がりがあるな、やっぱり生徒のエネルギーがすごく出てくるんじゃないかな、という自分の仮説を持って、これは担任次第だろうということですね。各学年から、本当に声の大きい人っていうか、指導力のある人を昨年の中1に集めてきたわけです。そうやって始めたんです。ですから学年なんか、いまだにまとまるのは大変なんですけど、各クラスの担任は生徒をちゃんと見てくれているという気がするんです。

それで見ていると別学のほうが子供たちのキャラクターがものすごい前面に出ますね。男の子も女の子もそうです。男の子なんか、草食男子のなかでももちろん、肉食系もいれば草食系もいるし、男子らしい男子もいれば女子的男子もいるわけですね。女子の場合も、もちろん男子系の女子もいるし、女子系の女子もいるということで、そういう面でいくと隠れているキャラクターが前端的に、出てくるんです。だから子どもたちからすると教室で自分のキャラクターを非常に共学にくらべると発揮しやすいという現象が生まれるという事なんです。

指導もやっぱり男子と女子で見えて全然違う。じつは結構仮説が当たってきた話でいうと、男子のほうの話をすると、男子校でよく言われている事なんですけれど、自主自立とか、強い男子とか逞しい男子を育てましょうみたいな話がありますよね。あの話べつに間違っていないと思うんですが、いまのお母さんたちにいうと、それ正しいんだけどうちの子には当てはまらない。うちの子をなんとかしてくれるところがないかな、ということに保護者はヒットしているようです。実は草食男子を女子的に扱う癒し系の男子教育ってというのは、これは人気があるんです。

保護者に話していると、うんうん、うなずいて、ここだったら何とかかなりそうかなって思う人、逞しい男子は来ないのかもしれないですが、だいたいそんな感じですね。

男子はさきほどでてきたように。時間がかかります。ですから見ると男子クラスの担任の先生は毎日おなじことを注意して本当にかわいそうです。

昨日も言った、終礼でも言った、親にも電話した、なのに翌日また宿題忘れたみたいな、いつもそんな話なんです。でもいつかは治るよ、と信じていこう、そういうくらいの気持ちで男子はやっていいきましょう、中二や中三ぐらいまで成長するには時間がかかるんだということは先生たちに言っています。

女の子は、面白いのは女の子だけのクラスにしたら宿題忘れなくなりました。男子と一緒にだと忘れる。男子のだからしないのに隠れてたまに女子が忘れていくっていう現象があるんですが、女子クラスだと、先生がチェックするとみんなやってきてます。女の子は厳しくやったんほうがいいんだな、っていうことは感じました。ですから見ていると女の子に対して厳しくやってるクラスは非常にクラスもまとまるし、やっぱり女の子ほうが成績の伸びがとていい感じがしますね。

うちは最後二年間は共学で混ぜようという話をしていて、最後は男の子は女の子のママに学習に取り組むところを見習って欲しいし、女の子はですね。男の子の最後、根拠なく頑張るところっていうか、男の子は根拠なく最後なんとかなるという、きわめて変な生き物なんで、何で計画的にやらないのだろう、ってよく言われるのですが高3の二学期になって一般受験に向けて最後がんばる時期になると男の子は急に頑張りだして、結果、志望校に入れるという現象が起きている。

これは、女子と一緒に乗っかっていったほうがよいというか、女子は最後、成績がちょ

っとでも落ちると志望校さげてA0とかで入っちゃうんです。男子の勢いで、どうも乗っからせたほうがこれはいいなと、いうふうなことを考え、最後二年間は共学でやってみようと言うようなことですね。

学年別でやっていくという最中でございます。ありがとうございました。

實吉先生

2020年東京オリンピックは嘉悦の周りは大変なにぎわいになると思うので、それまでにいろんなことが確立していることを祈っております。あの、先ほど今井先生のほうから化学の授業ということで、やはり高3なっても、まだいろいろあるよねーというふうにお話しありましたが、嘉悦さんの実験を楽しみにまたお話を聞かせていただけたら、というふうに思います。

今まで別学というふうに言われていた学校もじつは校舎としては一つ、おんなじ建物のなかかなーというふうに思います。桐光さんの場合にはまったく女子棟と男子棟があって、まえから男女別学あだということを桐光学園の売りとして、売りというか特徴としてお話しをされてきたというふうに思っております。男子棟、女子棟のことも含めてご経験のところをお聞かせいただければというふうに思います。中村、ワールドカップありますが中村の話はしなくてもいいですから。よろしく願いいたします。

桐光学園中学校・高等学校校長

村上 先生

みなさん、こんばんは。桐光の村上と申します。

順番が最後なので、だいたい話は出尽くしているかなと思いますが、男子特有の「根拠のない自信」に満ちた話を、少しだけお話させていただきたいと思います。

本校は、もともとは男子だけの高校でした。そこに5年目から男子の中学を併設して13年目に女子を中高一緒に立ち上げたというかたちです。ですから女子を受け入れた時には、物理的に、男子校の校舎でしたので、女子トイレもなく、隣に女子棟を建てて、別学というかたちで、いわゆる共学にしないで始めた、という経緯があります。もちろん、お近くに桐蔭学園さんもありますので、男女別学という形を参考にさせていただいてというところもあったと思います。

私は女子を受け入れた二年目に、それまで男子で10年間担任をやって、女子の中学二期生の担任になりました。基本的にはやはり、男子でせつかく10年間やっていたことが女子ではなかなか上手くいかないな、という経験をしました。10年間教員をやっていても、たいした進歩もなかったのですが。私は、大学を出てすぐ、桐光に就職したので男子校に就職したという気持ちをもっていったときに、「女子を受け入れる」という事はたいへん大きな

変化でした。女の子はいたほうがいいかな？学校が明るくなるかな？という感覚はありました。女性の先生も増えるであろうし、いいかな？と思っていました。

いざ担任になってみて、まず何ができないか、というと自分のクラスの女の子の生徒が、10メートル～15メートルぐらい向こうから、「村上先生！」って手を振ってくれるのですが、どう対応したらいいかわからない！男の子は、そんなことしませんでしたから。最近の男の子だったらするのかもしれませんが。そこから始まった感じです。

言葉遣いについても、女の子を教えるのだから「俺」とかいうのは止めて、「わたしは」とか、「僕は」とか、極力ていねいな言葉遣いを心がけたつもりです。それからもちろん服装も気を使いました。というふうに始めたつもりだったのですが、この女子の二期生が高校を卒業するときに、「でも先生はよく俺、俺って言っていましたよね。」と言われて、ほんとうにショックを受けました。

さて、今日の本当のお話のひとつは、最初にお話があり、基調講演のなかでもあったように、男女の特性の違いを、もし、授業を別にすることで活かせれば、というところがあったと思います。そういう点では男子校の先生方は、男子に合った授業を無意識のうちにやっていたらいいと思いますし、女子校でもそうだと思います。そこで、われわれはたまたま、あとから女子を受け入れて女子クラスとして、教員組織としては組織を分けなかったもので、男子部・女子部の教員はそれぞれ、男子も女子も教えるという経験を持っていました。まあストレートに言ってしまうと「男子でのノウハウはそのままでは女子で活かない」という失敗談を沢山、持っている気がします。

それは前任の伊奈校長もよくおっしゃっていました。ちょうど私の担任した中学二期生の女子の理科の授業を、前任の伊奈校長に担当していただきました。伊奈校長は若いころから桐光の中心的な教員で、当時は教務部長でした。私は担任として、あまりいい言いかたではないですが「教務部長の伊奈先生が、みなさんの理科Ⅰの授業を持ってくれるから、ちゃんとやりなさい。」生徒は「はい」と、なるわけです。それで大丈夫かな？とっている、ある日、クラスに行ったら白墨に「伊奈ちゃんのチョーク」って彫ってあるんです。ほんとに女の子は（男子と違って）面白いな～、フレンドリーだな～と思って見えました。

伊奈校長は、実は「初年度の女の子の理科の授業は本当に失敗した」というふうにおっしゃっていました。この話をこの場でもされたことがあるのではないかと思います。そういった点からいうと、中井先生の「男女別学」の本を、私が23年前に読んでいれば、いろいろ失敗しなかったのではないかな、と本当に実感として持っています。とくに一番は、先ほども画面に出ていましたけれど、「スモールステップを大切にすること」です。女子についての指導法ですね。私は世界史の教員ですが、多分、国語や社会科の例でいうと、そんなに男女差は関係ないな、とは思っているのですが、それでも授業をやっている立

場からすると、かなり失敗したな、という記憶があります。

その失敗を後から振り返ると、ああ、なるほどな〜と。今さら、もう一回授業するわけにいかないのですが、例えば私が最近話をさせていただいているのは、高校二年生の世界史の授業。中世西ヨーロッパの「イギリスとフランス」という単元で、「マグナ=カルタ」とか、「シモン=ド=モンフォール議会」など、いわゆる現代の立憲政治・民主政治の一つのルーツは、この時代にある、ただしもともとは王様と貴族の争いから始まり、議会のルーツもそうだよ、という話をしていくときに、男の子は、やはり、大局から部分を見た方が理解しやすい。まずは現代からみた歴史的意義を伝えて「近代の民主政治の起源の一つが、ここにあるんだよね。」と、ザーッと説明してあげると、非常によく理解してくれます。

今だったらどんな話をするかな？たとえば、「集団的自衛権」の話をするかもしれません。現実的な話と結び付けながら、そんな話を男子にはする。で、女子の場合は、やはり「マグナ=カルタ」って何なの？その事件はなぜ起きたの？という事を、本当に「スモールステップ」が大事なのです。1215年に王様のジョンが、これこれこういうことがあって、しょうがないから、貴族の権利を認めた、というところを、「細かい」説明を「きちんと」してあげる。私がそれをできていたかどうかはわかりませんが、やはりいろいろな色のチョークを使ったりしながら、疑問をのこさないかたちで、一つ一つ積み重ねていって、最後に、では「今日の授業では何が良かったのか」、という話をしあげたほうが、明らかに、今思うと、上手くいったのではないかな、と。当時の私は、そういうふうに気がついていなかったですね。非常に難しかった思い出があります。それで、この別学シンポジウムも数学科の教員、たぶん今井先生とご一緒にさせていただいた教員たちと、このような話をだいぶするようになりました。ですから結果としてはやはり、本当にそういうところの違いをまた授業に戻していく、はじめに完成された男女別学の指導法についての「原則」があって、ずっとそれをやってきたということではなく、経験的な失敗を繰り返さないようにしていくというなかで、ようやく「ちょっと分かってきたかな？」と思います。私どもの学校としては、そのように女子の教育に悩んでいた学校なので、やはり女子校さんに見学に行かせていただく、というところから始めました。

それで気がついたのは、「スモールステップを大事にする」というような、本当にきめ細やかな教育改革は、女子校から始まっている。男子校はおおざっぱなので大丈夫かな？と思うところがいまだにあるのですけれども、そういうところは本当に勉強させていただきました。一方、それから、実は3年前、4年前くらい前に北原先生の本郷中高で、これはもう評判の「生徒自主運営」の体育大会を見学させていただきました。私も見学に行きました。本郷の体育祭では、生徒たちが見に来てくれる保護者のことも考えて運営をしている。これは凄いなと思いました。なんとか真似したいな、と思って、ようやく今年から生徒の実行委員会ができて、今始めようというようなところです。とくに体育大会では男の子が、DJ といつかナレーションしながら面白く、あれがはまったんですね。お母さんたちの心をわしづかみにするような。男子校ならではの素晴らしい手法があるんですよね。まあそれ

をうちの学校でそのまま真似できるかどうかかわからないですけども。

できるだけ授業の話をしたいな、と思っていたのですが、それについては、中井先生のご本のなかになんかなり書かれている、という気がしています。

あとひとつだけ、クラス運営という点で、女子を担当して、とても驚いたのが、さきの挨拶の話もあるのですが、「多数決」をするときですね。例えば、文化祭の出し物とかですね。多数決の時に、A案B案C案があつて、では決めよう、という話になった時に、初体験したのが、「(顔を机に)臥せって手を挙げる」ということですね。男子は、そんなことはやらなかった。女子は、「はい、じゃあ、臥せって」と言って、たぶん、小学校ころからやっているのでしょうか。どうなのでしょう。その瞬間、みんな、机に臥せている。つまり他の人の意見に影響されないように、こうやって(臥せたまま)手を挙げる。横目で見たりするのかもしれないですけど。これも先ほどからでている(女子は周囲の意見を気にするという)話と共通するのかな、という気がして聞いておりました。

それから男の子らしさ、女の子らしさ、について、私が思うのは、さきほど震災の話が出ましたけれども、震災からあとは、男の子が全体を考えるようになって、「皆と協調する」という意識がものすごく高くなってきている。それが、「女子的な態度」と言えるのかどうかかわからないですけども。そんな気がしました。すみません、まとまらない話で申し訳ありません。

實吉先生

いいえ。ありがとうございます。今日、20分まで予定をしていますが多分こちらの先生はまだ消化不良だと思います。もっと言いたい事あるよ、というお話しに至ると思うんですね。

たぶん会場から少し聞いてみたいいな、せっかくここに来たんだからというかたが、おいでだろうというふうに思いますので。

今日は、実は中学受験という事では、このあいだの協会が主催した相談会のなかですね。講演をいただいたおたさんが見えているんです。おたさんは、中学受験、女子校、男子校について書く、っていう今までのご経験があると思うので、今日の話にからめて少しみなさんに、こんなこと、ってあったらお知恵を。

教育ジャーナリスト

おたとしまさ様

とても動揺しているのですけれども。教育ジャーナリストをしております、おたとしまさと申します。「男子校という選択」という本ですとか「女子校という選択」っていう本ですとか中学受験という本を書かせていただいております、本当に中井先生にもいろいろと、ご指導をいただいて。漆先生にもご指導をいただいて本当にここにいまいらっしや

る先生方、あの西川先生にも、北原先生にも大変アドバイスさせていただきながらですね。本を書かせていただいております。

今日話を聞いているなかでひとつ、私がいろんな取材をするなかで男子校と女子校のなかで面白い違いに気づいたことをご紹介しますね、と思います。

運動会。体育祭ををするときに、品川さんは学年対抗ですね。いまお聞きしたのは女子校では、学年対抗では中一対高三で、かけっこしたり、綱引きしたり。それはもう明らかに高三が勝つ、分かっているでしょう、みたいな体育祭でそれからこれ、何なんだろうと。私自身が男子校出身で北原先生の後輩でもあるんですが、あと女子校でちょっと先生をやったこともありまして、それぞれの経験があるのですが何でこの男子校と女子校でチームわけの仕方が違うんだろう。男子校では必ず縦割りにして黄色のチームと青チームとやって、互角に戦えるわけなんだけども。女子校の場合はもう最初っから勝ち負けがわかっているような、これ、いったい何なんだろうな、と。

先ほど佐々木監督の話がでてきた、女の子には横から目線、男の子には上から目線。それよりも自分たちのチーム。協調性っていうのかな、どれだけ高めることができたか？ここに満足があってもいいんだ。いうふうな、そしてその縦型の組織でなくて横型のフラットな共感をベースにした組織を作るんです。それが得意であって、それが心地いい。ということなので縦で、勝ち負けを競うよりも実は横にしてですね。チーム内のチームワークってものを大切にする。体育祭のほう盛り上がると。ということで割と、女子の伝統校にはですね。横で学年別に対抗するというふうな学校が多いんだなっていうことを色々と取材しているなかで気づいて。

「やっぱり男性と女性と、それから社会の中でも縦系、横系というかたちで行くといいんじゃないかな。」今までは何でもかんでも縦型の社会を基本にやってきた。それがに硬直してしまっているのは是非、これからはね。女性にも、社会に進出していただくと世の中も変わっていくと。なんてことをですね。男子校と女子校を取材して感じたことです。

ありがとうございました。

實吉先生

今日、漆先生のお話から始まりました。女子の社会のなかでの、なんて言うんですかね。生き方っていう話だったと思うのですけれども。7月はあと10日ほどすると文科省の人事があるんですかね。板東さんが次官になりますかね。板東さんが次官になったら、ちょっと文科省の動きも変わるかな。教育観も少し変わるかな、というふうに思うんですね。このへん、取材をしていて朝日小学生新聞はあんまり、政治のところは関わらないんですかね。今日、朝日小学生新聞の社長になられた脇坂さんが、会場に来ていただいているので、脇坂さんのほうから何か。新聞の宣伝もO.Kですよ。

朝日小学生新聞社長

脇坂様

はじめまして。学生新聞社の脇坂と申します。ほとんどの先生、初めてなんですが、この3月まで朝日新聞社の横浜というところで総局長をしていました。

皆さんがたお子さんをお育てになって、メディアがどの大学に何人という雑誌をたくさん発行して大変ご迷惑をおかけしております。しかし恐らく、漆先生おっしゃったように5年10年すると、大学の話ではなくて、どの会社で何の仕事をしているかを高校は問われる、見られるんだらうなというふうに思っています。

朝日新聞社は入社試験で大学名を聞いていません。ご存じと思いますが、今年東大から誰も入ってなかった。最終の手前までは東大の子がたくさんいたのですが、結果としてそうなったというだけのことなのです。何を申し上げたいかという皆さんの時代に育った、皆さんの時代に頭の大半は決まると思っています。中高のときに決まります。どれだけ頑張れるのか、最後に何をするのかの決断をするのか。全部とは言いませんが大半は高校で固まるかと思えます。大学行ってからはそれに枝葉を含めた細かいディテールを沢山掴むかもしれませんが何をやる人間にならうかというのは高校までだと思っております。これからそういうことが問われる時代に皆さんのお役目、大変重たいと思えますが応援しております。学生新聞からは皆さんへ、送り込む側ですから、ご利用いただければと思います。

實吉先生

突然指名しまして、失礼いたしました。どうでしょうか、会場からご質問などを、どうぞ。御所属とお名前を恐れいりますがお願い致します。それから誰に聞きたいかをご指名ください。

藤女子中学高等学校（北海道）の先生

お話、ありがとうございます。藤女子中学高等学校からはるばる参りました。じつはです。今日来るにあたって先生方、皆さんにお聞きしたいことで学校の教員から頼まれて参りました。いま、本校、女子校で色々と授業改革をしているのですけれども、その中で、もしかしたら女子には習熟度別学習っていうのは合わないんじゃないかということが、出ていました。女子の上位層を伸ばすには有効かもしれないが、中位、下位の子に対してはどうなのだろうかということが一つ、出て参りました。先生方で、そのあたりご経験を分かちあっていただければ助かります。また、習熟度別に変わる、例えばわたくしも大した勉強はしていないんですけれども、女子には共同作業が向いているということで、そういった形態のほうがより効果的なのか、ぜひ教えていただければと思います。よろしく願いいたします。

實吉先生

今井先生、お願いします。

今井先生

いま先生おっしゃいました悩みっていうのは、じつは私どもの学校でもありました。男子校で女子が入り、男子にはもともと成績で分けた、言い方はよくないんですけど習熟度別のクラスが女子には相応しくないというふうに、とても勝手な判断で、やって来ました。ところが、私も子供がもう社会人になっているんですが自分の子供が小学校に通っているところ、中学に通っているところ、じつは学校の授業を見る機会が日曜日ですのでありまして。そういうなかで見てもみたら小学校はすでに普通に行われているんです。

子供たちに聞いてみると確かに、個々に聞けばいやだ、という子もいるが、基本的には小学校時代に慣れていることがわかり、それで今では女子のほうでも、募集形態のなかでも区別が、例えば中学三年生になりますと英語や数学の習熟度別を採用しています。これについてはやはり自分のその時にある学力に応じたアプローチの仕方をしてもらえるということで子供たちにとっては非常に評判はいいです。やってみて良かったなと思いました。中学二年生のときに一クラスを二つに分けた少人数制というのを実際体験するのですけれども、それも途中で子供たちのなかからも教員のなかからも、一学期はいいんだけど二学期、三学期になったら、これは絶対学力別に分けたほうが効率いいんじゃないか。自分たちにとっても自分にとっても、ちょうどいいスタンスで授業が受けられるんじゃないか、という声が実際に中から出てきた。ですから地域によってとか、その時の子供の個性によってやっぱり違うと思うんです。大人の勝手な思い込みで考えれば子供のほうが柔軟性あって、そして自分になるべくあったクラスで受けたいと思うのではないかな、というふうに思います。

例えばこれも私ども勇気をもって出来たのは過去に鷗友さんで授業を見せていただいて、そのなかで色々伺ったことも、頭のなかにもありまして。それで、そういう方向に動くことができた、ということです。答えにはならないかもしれませんが、同じように悩みましたという経験ありますので。

實吉先生

いま、たまたま学校の名前がでました。西川先生、司会だけじゃ、面白くないでしょうから。今のお話に少し鷗友さんのことでお答えがあれば。

西川 先生

鷗友学園では、中学の間は習熟度はまったくございませぬ。というのは中学入試で一生懸命勉強して入ってきているわけですし、そんなにしなればいけないほどの差があると

は思っていないからです。高校生になりますと英語や数学で習熟度別をしておりますが、個人的にはあまり細かく分けることは賛成しておりません、それでだいたい多くても3つのレベルに分ける。あんまり細かく分けると下の子たちのクラスが本当に重たくなってしまって教員のほうもなんとなくやり難くなりますし。やはりモチベーション高い子の授業態度から学ぶことも多いので、私は2つぐらいがいいと思っている。3クラスを分けるときは進んだクラスをひとつと、普通のクラスを二つ作ることが大切かなと思っています。基本的には今井先生がおっしゃったように、生徒はそれが全てではないということがよく分かっていて学校生活が楽しくて充実していれば全部の教科が習熟度クラスではありませんから例えば英語や数学のようなものでも自分に合ったクラスで勉強が出来る方のメリットを、ほかの充実した生活があれば感じる事が出来るというふうに思います。高校三年生ぐらいになりますと全く選択と、自分の受ける学校の入試問題の出題傾向から自分でやりたいコースを選んで、まず英語の場合はそういうことがあるし、かなりの選択を許しております。

實吉 先生

公立の学校と私立の学校との違いは、来てくれている子供の層という言い方をしたら失礼かもしれませんが、それが一定のレベルにあるということはあるかもしれないでしょうし、学校によってはかなり幅があることによって分けるほうがいい、っていうところもあるでしょうし。佐藤学先生なんかは習熟度授業をした、なんていうふうに言われています。それはたぶん、学習の規模にもよるのだと思うんですよ。よくフィンランドが例にですけれども15人とか20人で学習している集団と35人、40人の集団で学習する集団とでは多分、違うところもあるんだ。あの、それでいろんな学校をお尋ねになってお仲間をたくさん作っていただいたらいかがでしょうか。

漆 先生

習熟度別クラスと習熟度別授業は違うと思うのです。うちも色々やまして、授業に関しては、やはり得意不得意が、英語が得意な子とか、数学が得意な子とか、やはりいろいろいるので、習熟度別授業というのは一定の効果があると思います。とくに苦手な科目を少ない人数にするとか入れ替えが自分の努力でできるので、それがモチベーションにもなるから「習熟度別の授業」というのはある程度効果があるというふうに思っております。

本校では「習熟度別のクラス分け」というのは4年前にやめました。結果としては上位層も伸びましたし、中堅層も過去最高の進学実績というのを出しております。というのは實吉先生がおっしゃったように、ある一定の学力レベル以上の学校で習熟度別クラスというのはやっていないと思います。そこに行くまでの過程では縦長にクラスをわけた方が、ある程度のケアがしやすいという時期もあったのですが、今は、MARCHレベル以上の偏差値

60 ぐらいで入る大学に6割ぐらい進学しているのですが、そのレベルになりますと「クラスは分けられない方が良かった」という結論が出ました。クラスを分けると女子の場合、その差別感をすごく感じるそうです。上位クラスに入れなかった子は卒業してからも言いますし、逆に上位コースに行った子については小さな優越感で周りと比べるということもあります。長い人生で考えたときに、「これって、どうかな？」と。それよりも、教え合いということで、教えた子の学習定着率は80%、教わった子の定着率は5%という説もあるので、自分ができることについて周りをサポートする場を持ち、リーダーシップを発揮する場を持つことの方が上位の子にとってもいいし、下位の子にとっても変な劣等感で、自己肯定感をなくすこともない。ということで結果的としては、習熟度別授業はある程度効果があると感じていますし、習熟度別クラスは本校の学力レベルにおいては、今は必要がないというふうに結論になっております。

實吉 先生

時間も参りました。今日お話をいただいた5人の先生方に改めて拍手を。マイクを西川先生に返します。

西川 先生

5人の先生方、實吉先生、本当にお疲れさまでした。ありがとうございました。それでは最後になりました、清水哲雄先生に閉会の言葉をお願いいたします。

—閉会の挨拶—

清水 先生

皆さま、お疲れ様でございました。

あつというまでした。おもしろかったです。皆様、いかがでしたでしょうか

私はもうすこし、教科の話もしてもらおうと具体性があったよかったですな、と思ったのですが。思っていたんですけども、今日、こういうお話しを聞きますと時間的にもう、無理ですね。総論的なものも非常におもしろいものがあったように思います。

私はこれにメモをとりながらやっていたんですけども、ふと思い出しました。じつはこれ、鷗友では教職員、全員もっているんですね Ipad air っていうチョイスで持っているんですけども。

前回、いつごろでしたかね、4月中旬でしたかね、これの使用方法についての説明会があったんです。対象者は先生がたなんですね。先生方、男子も女子もおりますので聞いていたんですけど、その説明を聞いていて、「これ生徒に説明するときに、どうするのか」と思いました。皆さんのところも、必ずこういうのが入ることになりますよね？たぶん、あります。デバイスが違うとか、機種が違うというケースもあると思うんですけど。それを男子と女子に説明するときに、どうやって説明します？この使い方。

僕ね、かなり違うと思いますね。ある意味、男子なんかですともう「マニュアルなんかいない。すぐわかるよ。試行錯誤してれば、二、三回間違えればすぐわかる。」っていうぐらいの男子も、まず間違いなく言います。

しかし女子はそうはいかないと思いますね。女子のなかでも特殊な人はいますけれど、一般的にはですね、かなり準備を用意周到にして説明をしないと、「やだ！こんなの」って言われたら、こちらの負けですから、そうさせないようにしなくちゃならないんで。非常におもしろいテーマだな、と思いました。で、そんなことを感じながら、これ見ていました。

最後に習熟度の話がでまして男子校も聞いたかったですね。あの、ちょっと聞きづらかったんですけど。まあ、先ほど實吉先生がおっしゃったようにフィンランドの例がでましたけれど。私も行って見てきましたが、フィンランドの子どもたちは手をつないで上がってくるって言います。つまり、ドロップアウトを一人もださないという考え方なんです。

ドロップアウトっぼくなるから習熟度別をやるんですよ。初めからドロップアウトがあまりなかったら習熟度別はないはずですよ。では最初にまずドロップアウトを出さないことを私たちは考えなくちゃならなくて、出た時にどうするか？が次に考えることだと思います。初めから習熟度別はあたりまえだという発想は、私は持たないですね。それを男子と女子と分けてやったらどうなるか？というのも、どこかでまた聞きたいな、というふうにも思いますし、フィンランドのことなどをいうのでしたら、先ほどちょっと話も出ました。佐藤学先生、いまは学習院の先生で教授ですけども『学びの共同体』というのが出ておりますので、ぜひ読んでいただくと、どういうことなのか、わかると思いますので、ご参考になさってください。

8時半になります。本当に長いこと、熱心に皆さん、ご参加いただきまして、誠にありがとうございました。次回どうなるか。私は責任のある発言はできませんけれども、なんらかのかたちで何か続けていけたらいいな、というふうに思っております。また、今日参加された方々のなかでネットワークを組んでいただくことが、これがいちばん大きいかなーと思うんです。いろんなかたと、こういう場合はどうしたらいいだろう。ここはどうなっている。ということで情報交換をしていただくことがすごく大きなことになりますので、ぜひぜひ仲良くなってお帰りいただきたいと思います。本日は誠にありがとうございました。